

「いひなづけ」(チエーホフ)

二十三歳のナーヂャは田舎町の地主屋敷で祖母や母と安穩に暮してゐたが、祖母の勧めで神父の子息アンドレイと婚約し、近々結婚する事になつた。アンドレイは嫌ひではなかつたし、結婚に憧れてもゐた。それなのに、なぜか「心がはづまず、夜もよく眠られ」ない。それどころか、結婚式が迫るにつれて「得體の知れない重苦しいもの」が待受けてゐる様な「恐怖や不安を覺え」る。

屋敷にはサーシャといふ祖母の遠縁の男が滞在してゐた。結核を患つてモスクワから靜養に來てゐたのだが、常々屋敷の暮しぶりを辛辣な目で眺めてゐて、或時、ナーヂャに云ふ。御宅の臺所を覗いてみたら、女中四人が襪褌を引被つて床にちかに寝てをり、惡臭はひどいわ、南京蟲や油蟲は集つてゐるわ、「二十年前とそっくり同じ」有様なのに、お祖母さんもお母さんも「一ん日じゆうぶらぶらして」何もしない、貴女やアンドレイ君だつてさうだ、それは詰り皆の代りに他の誰かが働いてゐるといふ事で、「それが一體、清らかなことでせうか」。「何の

ために自分が生きてゐるのかを知つて」ゐる、「教養のある、清らかな人たちだけが好ましい」のぢやありませんか。ねえ、ナーヂャ、こんな「よどんだ、灰色の、けがれ切つた生活」とは縁を切つて、いつそ勉強においでなさい、「いちばん大事なことは、生活の方向を變へることで、あとのことは大したことぢやない」。

これらの言葉が「頭から離れない」でゐた或日、ナーヂャはアンドレイが彼女の腰に手を回し贅澤ぜいたくな新居を嬉しげに案内するのを見て、「何もかもが俗悪で、たまらないほど馬鹿ばかしく思はれ、「アンドレイを、自分自身を、この怠惰な無意味な生活ぜんぶを輕蔑してゐる」とサーシャに語り、家を出て勉強する決意を告げ、家族に黙つてペテルブルグに赴く。

一年後、歸省の途次、モスクワに立寄ると、サーシャは至つてだらしない生活をしてゐて、病状もひどく、既に墓に葬られた様な雰圍氣を漂はせてゐた。祖母や母はナーヂャを許してくれたが、屋敷の様子は舊態きうたい依然、何一つ變つてゐない。そこへサーシャの死の知らせが届く。ナーヂャは自分が田舎では「獨りぼつちの、不必要なよそ者」になり、「サーシャの希望したやうに自分の生活が方向を變へたのをはつきりと自覺」する。すると「目の前に、新しい、廣

い、はてしない生活が浮かんで」来た。彼女は「生き生きとした晴れやかな氣持」で町を去る。

チェーホフ最後の短篇小説であり、次いで最後の戯曲「櫻の園」を書いた後、彼は結核のため四十四歳で世を去つた。作品の明るい結末についてトマス・マンが書いてゐる、「これは、『人生が出口のない問題である』ことを知つてゐるはずのこの作家が、時折自分自身に、あるいは作中人物のだれかに許すはかない未來の幻のひとつなのだ」（木村彰一譯）。さうかも知れぬ。サーシャは敗殘の夢想家でしかなかつたし、田舎の屋敷は過去に停滞して淀んだ儘だ。けれども、マンは又、チェーホフが「人生をよりよくする眞理のつつましいしもべ」であつたとも書いてゐる。祖父が農奴の小市民の家に生れ、頑迷で横暴な父に苦しめられ、苦學して醫者となり、父母弟妹を養ふ爲に短篇を書き捲り、二十九歳で結核を發症するが、内なる奴隸根性や負犬根性と血の出る様な戦ひを續け、「私は嘘や怠惰や心の弱さを輕蔑する」と云ひ云ひして、作家として醫者として生涯實に誠實にストイックに働いた。「己れを善くする事、世界を善くする爲に我々に爲し得るのはそれしかない」とのヴィトゲンシュタインの言葉が想起される。（池田健太郎譯、チェーホフ全集十一、中央公論社）